

タイから名取へ、名取からの世界へ

タイ駐在代表 春日智実

東日本大震災の長期復興支援活動として取り組んできた「海岸林再生プロジェクト」の第1次10カ年計画が終わろうとしている。

担当部長の吉田俊通がたびたび口にするのは、

このプロジェクトを構想するきっかけとなつたのは、オイスカ・タイが進める大規模植林プロジェクトだったということ。

タイと名取が紡いできた絆、そして「これから展望をタイ側からレポートします。」

東日本大震災から10年。毎年3月になるとより強く迫ってくる「これから私たちは自然災害とどう対峙していくべきなんだろう」という漠然とした問いは、どこか夏休みの宿題みたいな感じで、10年間、いつも心のどこかで引っかかるつていた。その答えを導き出してくれたのが、これまで私が出会い、私を支えてくれてきた20年来の人々とのつながりだつた。

双方への気づき

10年前、母国日本での大災害のニュースは、遠く離れた

異国にいる私には、耐えがたいほどの心の痛みを感じるものだつた。ほんのついさっきまでオイスカ宮城県支部の皆さんと植林をしていたのに、あの人たちも被災者になつてしまつた。支部で企画したタイでの植林ボランティアに参加した一行は、活動を終え、帰国目前で震災のニュースを知ることになったのだ。

タイにいる自分に何ができるだろうかとじつと考え続け、タイ在住の日本の子どもたちと一緒に、駅で毎日募金活動を行つた。声をからして「日本を助けてください!!」と連呼し続ける子どもたち。母国

から離れている日本人はきっと、みんな同じ気持ちだつたと思う。私たちの想いは多く、のタイ人やバンコクを観光中の日本人にも届き、わずか7日間で225万円もの募金が集まつた。

これまでに各自が400バーツ（およそ1400円）貯めていたのだが、その貯金の全額をメンバー全員が迷いもなく差し出してくれた。「日本人を励ましたいけど、電話番号が分からぬし、言葉も分からぬ」「わざかな金額だけ、こんな形でしか応援できない」そんな言葉をかけてくれたが、彼らの日々の作業の厳しさを知つてゐる私には、このお金を受け取つたお金の重みに、声が震えて感謝の言葉も出せないほどだつた。総額362万円。それは、タイがこれまで日本から受けた。たくさんの支援に対する、大きな大きな感謝の気持ちだつた。

その後も帰国研修生OBをはじめ、「子供の森」計画に参加する学校、そして各地の植林プロジェクトの村人グループなど、全国のタイ人からの募金も次々と届いた。

ラノーン県のプロジェクトの村人グループからは何度も聞かれた。「以前植林に来てくれたあなたたちは元気ですか?」「日本は大丈夫ですか?」と。当時、彼らの日当はわずか200バーツ（現在のレートで700円ほど）。グループでは、そのうちの10バーツを毎日コソコソと貯めていく植林貯金活動を始めていた。そ

れまでに各自が400バーツ（およそ1400円）貯めていた。わずかな日当や小遣いから出してくれた募金。受け取つた

お金の重みに、声が震えて感謝の言葉も出せないほどだつた。総額362万円。それは、タイがこれまで日本から受けた。たくさんの支援に対する、大きな大きな感謝の気持ちだつた。

このときから自分の仕事に對する見方が大きく変化した。（笑）吉田氏とは、東日本大震災の直後に、その長期復興支援の取り組みとして「海岸林再生プロジェクト」を構想し、現在もプロジェクトの担当部長を務める吉田俊通のことである。私がオイスカの職員として採用された時、吉田氏と同じ部署に配属され、幸か不幸か（笑）彼は私にとつて見ながら動いて行くことが大事なことなのだと。

ティーノイの存在

宮城県名取市で進む「海岸林再生プロジェクト」とタイ。

一見何の関係もないよう思える。ところがこのプロジェクトこそ、世界を見ながら始動し、世界のモデルとなるものだつた。担当者の吉田氏は「（海岸林再生プロジェクト）は）タイのラノーン県でのマングローブプロジェクトからひらめいた」と、会うたびに

言う。もう耳にタコである。（笑）

吉田氏とは、東日本大震災の小さな取り組みとして「海岸林再生プロジェクト」を構想し、現在もプロジェクトの担当部長を務める吉田俊通のことである。私がオイスカの職員として採用された時、吉田氏と同じ部署に配属され、幸か不幸か（笑）彼は私にとつて見ながら動いて行くことが大事なことなのだと。

最初の先輩となつた。その後、私は青年海外協力隊でスリランカに赴任したが、任期後に再びオイスカに戻り2002年にタイに來た。その当時吉田氏は、神奈川県支部（現神奈川推進協議会）が中心となって取り組んでいたタイ東北部スリン県での緑化プロジェクトの日本側の担当窓口でもあり、タイでもまた先輩になつた。腐縁である。

募金と共にたくさんの応援メッセージも寄せられた



「ティーノイ」のタイ出張時に北部の寺院で撮影。右から筆者、プラヤット、ティーノイこと吉田氏、お坊さん、カヤイ、エウ（ラノーン県CFP担当）。中年チーム大集合（笑）



上／被災地を視察するカヤイ氏
下／吉田氏（中央）のタイの現場視察にカヤイ氏が同行（2018年12月）



植栽地でツルマメ抜き取りの手伝いをしたオイスカ・タイの役員たち。最高齢85歳も頑張った！

2002年というまさにそ

の感謝の気持ちとして、スリ
ン県から2頭の子象が寄贈さ
れることになった。吉田氏は
その大仕事も担当し、その頃
からタイの活動に深く関わっ
ていたため、オイスカ・タイ
の古参の役員たちからもかわ

というのだが、当時つけられた彼のタイでのニックネームだ（ティーノイは「ぼうず」「男の子」というような意味。すでにぼうずという年ではないけれど……笑）。

先述の一タイの仕事の進め方と、ラノーン県でのマングローブ植林プロジェクトからひらめいた」とは、そんなふうにタイとの深いかかわりの中でプロジェクトを深く掘り下げて見ていたからこそそのセリフなのだと思う。それは地域住民が中心にいて、住民の生活を支えながら森林を再生していくタイの活動の手法のこととで、それを名取で活動をスタートさせる際に参考にしているのだ。ラノーン県でオイスカのプロジェクト責任者となつているタイ王国天然資源・環境省職員のカヤイ・ト



福岡での「雑談」から1年。やはり狭い温泉宿で行われた作戦会議には、各国で大規模植林プロジェクトを担当するベテランスタッフたちが集まり、これから10年について真剣に語り合った（1910年1月）

ともなり得る。プロジェクトターゲットとするために私たちはどう生きるべきか、住民自身が考え、理解できるようにする必要がある。この頃から、オイスカ・タイの森づくりプロジェクトは、単に環境保全を目指すだけではない、「防災・減災」のための森づくりへとシフトを始めた。きっかけは12年3月に行つた「海岸林再生プロジェクト」の視察だったと言つてもいい。その後も、カヤイ・プラヤット両氏を中心に名取の視察を重ね、いくつもの绿化プロジェクトで成果を上げ、

私は答えに行き詰ると、チームにその問題を託してみるという手を使う。ずるく見えるけれど、これが一番良いのだ。だいたい一人で考えるよりも良い答えが導き出される。というよりも、一人で考えて出した答えは実行に移すのが難しい。みんなで考えて出した答えは実行に移すのもスムーズだ。だから残った夏休みの宿題の最後の一問を、中年チームの温泉宿での“雑談”に託すことにしたのだった。

その後、ティーノイは本部内に立ち上がったタスクフォ

今までよりも広い視野で、複合的に取り組まなければ解決できない目標だ。難問の答えが解けた瞬間だった。私の10年来の宿題の答えはチームの力によつて導き出された。私は一人で考えたつて、こんなことは絶対にできない。福岡の狭い温泉宿での作戦会議は、

ていく。「森づくり」という同じことをやつても目指すところが全然違つて見えてきた。手法も変える必要がある

くりをするというスタンスへ、

Eco-System based Solution
（自然を活用して行う社会課題解決アプローチ／EBS）
というオイスカ全体の次期10カ年構想を打ち出した。つまり自然の力を生かした防災・減災を考えていくものだ。この構想に基づき、カヤイ氏やヤット氏を中心とするタイチームは昨年末にEBSに関するワークショップを行い、オイスカ・タイとしての10カ年目標を数値化した。失われた森を取り戻すというスタンスから、災害を未然に防ぎ、人々の生活を守るための森づ

「ティーノイ、こんなすごい仕事をしたのか?!」と、オイバンスーク氏（同事務局長）とも同世代。私も含め同世代とも同世代。担当者のプラヤット・サム士、ちょうどお互いに節目となる時期には、お互いの現場を見て、刺激を受け合ってきた。

世界はつながっている。タイの発想が名取の海岸林再生につながり、その発想がタイにつながっている。

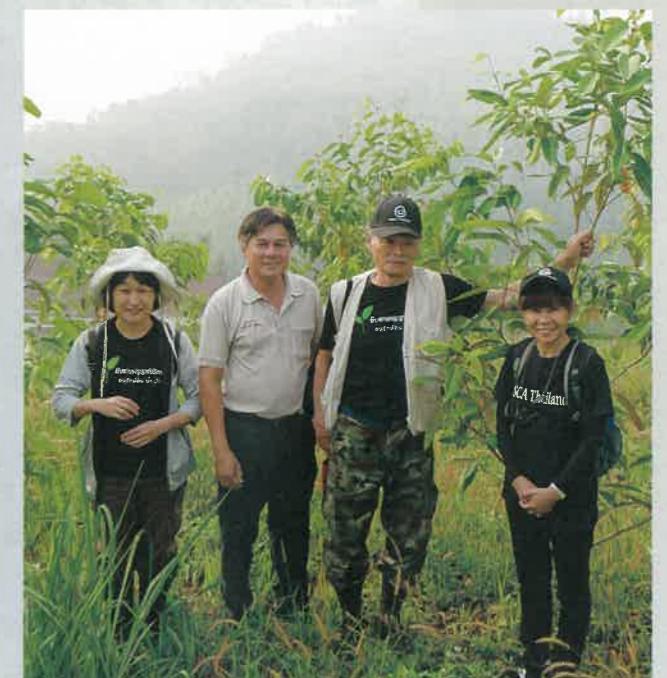
震災1年後となる12年3月11日。カヤイ氏とプラヤット氏は名取の海岸林の現場にいた。この視察を皮切りに、タイから名取の活動現場に何人の人が足を運んだ。そのたびに案内をしてくれるティーノイは、相も変わらず「タイがモデルとなつていてる!」と言うが、「こんなでつかい仕事なのに?」「これはプロの仕事だよ」とタイ人の誰もがそのプロジェクトの成果と手法にうならされた。それはモデルとなつたタイのプロジェクトを明らかに大きく超えたものだった。

さて、冒頭で書いた私の「夏休みの宿題」に話を戻そう。「これから私たちは自然災害とどう対峙していくべきなのか」

11年の震災以降も、世界各地で頻発している自然災害。私たちNGOの仕事は、こうした時代の中でどうあるべきなのか。こんなふうに文章にするともつともらしく聞こえるけれど、要はオイスカ・タイがこれから世の中で、引き続き必要とされるための生き残り作戦でもある。私にとって大きな課題だが、答えを出せずに最後まで残ってしまった夏休みの宿題だ。

そんな中、16年8月にオイ

チームで出した答え



N連プロジェクトには、アイサさんのご主人である見原隆明氏(右から2人目)が専門家として協力をしてくれた。

Profile

春日智実（かすが・ともみ）

大学在学中にオイスカが企画した「30日間植林ボランティア」への参加をきっかけに、卒業後は国際協力ボランティアとしてオイスカ活動に参画。翌96年から職員として本部、四国研修センターなどでの業務に従事。99年～2002年、青年海外協力隊で村落開発普及員としてスリランカにおける国際協力活動を体験。終了後にオイスカに復職し、現在に至る。猫が好きすぎて飼い猫と旅をするのが趣味。長野県出身。

169個もあるターゲットの内、何十項目もが当てはまってしまう。だから調子に乗つて挙げすぎて、「もうちょっと絞つてくれ」と言われてしまつた始末だ。でも、そんなオイスカの活動だからこそ、これまで世界で求められ続けてきたのだと思う。次の10年もオイスカが社会と世界が求めらる姿であり続けるために、「名取」をモデルに動き出すのだ。今度は私が「タイのこれから」のプロジェクトは、名取方式をモデルにしていくことを考へている」と耳にタコができるほど、オイスカ・タイチームに話しているところである(笑)。

連携無償資金協力（以下「N連」）を活用したエンライ恩での3年間（16年6月～19年5月）の大規模プロジェクトは、北部タイが直面している森林伐採などの無計画な土地利用や、森がない山岳地帯で頻発する土砂崩れや洪水、山火事やその煙害による大気汚染などの問題を解決するための森づくりと、再生した森と共に存していくための生計向上プロジェクトを組み合わせたものであるが、生活を守るプロテクター

大学在学中にオイスカが企画した「30日間植林ボランティア」への参加をきっかけに、卒業後は国際協力ボランティアとしてオイスカ活動に参画。翌96年から職員として本部、四国研修センターなどでの業務に従事。99年～2002年、青年海外協力隊で村落開発普及員としてスリランカにおける国際協力活動を体験。終了後にオイスカに復職し、現在に至る。猫が好きすぎて飼い猫と旅をするのが趣味。長野県出身。

個もあるターゲットの十項目もが当てはまつた。だから調子に乗げすぎて、「もうちょっとしてくれ」と言われてし末だ。でも、そんなオの活動だからこそ、この世界で求められ続けてだと思う。次の10年もカが社会と世界が求めあり続けるために、名ロジエクトは、名取方 デルにしていくことを「いる」と耳にタコがで ど、オイスカ・タイチ 話しているところであ

活を守るプロテクターは人々の脅威ともなるのみ合わせたものである。生した森と共に存していく。による大気汚染などの問題を解決するための森づくりが山岳地帯で頻発する土砂災害や洪水、山火事やその計画的な土地利用や、森面している森林伐採などを大きな問題に大きく変化させることができた。ロジエクトは、北部タラバガルバの大規模プロジェクト（以下、N